

リハビリテーション 科学研究科

修了生の声

~Graduate's Voice~



村川 勇一さん

さめき市民病院
リハビリテーション技術科 勤務

2024年度 リハビリテーション科学研究科 修士課程修了
(病態運動学分野・内部障害)

大学院で得た学びや経験を 臨床現場へ還元する

急性期病院にて働く中、日々の臨床疑問を解決する方法を学ぶために大学院への進学を決めました。

私は、大学院にて高齢肺炎患者さんの短期生命予後にCT画像を用いて測定した筋量や筋質が影響するかをテーマに研究を行いました。大学院では、自分の研究に対して多くの先生方や院生からご助言をいただくだけでなく、様々な領域の知識を得ることができ、充実した日々を送ることができました。

現在、大学院で得た学びや経験を患者さんへのリハビリテーションやスタッフの研究支援に生かすことができており、今後は現在の活動をより発展できるよう精進したいと考えております。



現在のお仕事

理学療法士として急性期病院で呼吸器疾患だけでなく、整形外科疾患や脳血管疾患など様々な患者さんに対してリハビリテーションを実施しております。臨床と研究活動を継続しながら、兵庫医科大学大学院博士後期課程にも進学し、忙しくも充実した日々を送っております。

リハビリテーション 科学研究科



尾崎 晴美さん

ユニ・チャーム株式会社 勤務 2019年度 医療科学研究科 修士課程修了
(病態運動学分野・運動器障害)

研究から学んだ理論と経験を 新たな領域で活用

私の研究テーマは、運動学や解剖学の観点から骨盤帯ベルトが身体に与える影響を考察することでした。三次元動作解析装置や表面筋電図から得られた結果より、骨盤帯ベルトで骨盤に外圧を加えることで、体幹筋の機能を補うことが可能となり、骨盤帯・体幹のアライメントが変化することを明らかにできました。

修了後は、商品開発職に就きました。患者様と直接関わる機会は減りましたが、間接的に患者様やお客様の生活がより良くなるように、大学院生活で得られた理論と臨床現場での経験を結びつけ、新たな領域でその知識・経験を活かせるように日々精進しています。



現在のお仕事

臨床4年間の経験と大学で学んだ理論を活かして、使い捨て吸収物品の開発、研究に携わっています。製品が身体機能にどのような影響を与えるのかの研究や、人々の生活がより快適になるような商品開発を行っています。

リハビリテーション 科学研究科



梅地 篤 史さん

兵庫医科大学病院 勤務

2018年度 医療科学研究科 修士課程修了

(人間活動科学分野 身体・認知活動)

修士課程で学んだことを臨床現場へ

平日に通常の臨床業務を行いながら月2回のゼミと、土日に授業を受ける生活は予想以上にハードでしたが、いろんな先生方と研究に関して議論できたことは、とても充実した時間でした。

私は造血幹細胞移植後の血液がん患者さんの、退院後の生活を研究のテーマにしていました。現在の臨床では、修士過程で得られた患者さんたちが困っている動作を入院中から入念に練習するよう心がけています。

また、修士課程で学んだ研究方法などは、職場の後輩たちが学会発表をする際のアドバイスなどに役立っています。今後も修士課程での経験を活かして臨床、研究ともに行っていきたいです。



現在のお仕事

作業療法士として大学病院で脳血管疾患から運動器疾患、がんのリハビリテーションなど、幅広い疾患の患者さんに対して、リハビリテーションを行っています。博士課程へも進学し、引き続き、研究も進めています。

リハビリテーション 科学研究科



上池 浩一さん

西宮回生病院 リハビリテーション科 勤務

2017年度 医療科学研究科 修士課程修了
(病態運動学分野・運動器障害)

41歳での挑戦で得られた かけがえのない経験

大学院では、「片脚立ち上がり動作」成績に影響を与える因子と運動パフォーマンスとの関係について研究を行いました。その結果から、新しい知見を報告することができ、さらに対象の範囲を広げて発展的な研究を行い、現在も学会発表や論文投稿を続けています。

41歳での進学、片道300kmの運転と大変でしたが、「学問に年齢は関係ない」「発見することの楽しさ」を実感できた2年間でした。



現在のお仕事

拠点を兵庫県に移し、整形外科を主とした病院で外来患者様の治療に携わっています。大学院で学んだことを患者様への対応だけでなく、若いスタッフの指導に活かしています。

リハビリテーション 科学研究科



大塚 翔太さん

**社会医療法人社団十全会 心臓病センター 榎原病院
リハビリテーション室勤務**

**2017年度 医療科学研究科 修士課程修了
(病態運動学分野・内部障害)**

充実した大学院での学びから 学問的発展への寄与に挑む

循環器単科の急性期病院での臨床を行う中、多くのクリニカルクエッションを得て研究に取り組んでいましたが、その手法や結論に疑問を感じていました。疑問に対する新しい知見や視点を得るため、この度修士課程へ進学を決めました。

ご指導頂いた先生方から研究内容や臨床活動における的確な助言を頂き、また他の分野で働くリハビリテーションスタッフから自分とは異なった切り口での疑問や視点を提示して頂き、充実した大学院生活を送ることが出来ました。

高度な専門的知識を持つ教職員、臨床者の皆様からのご指導や知識の共有を行う中で、本学の理念でもあるリハビリテーション科学の学問的発展への寄与に自分も添うことができたと考えています。

現在のお仕事

現在も急性期病院にて、心臓リハビリテーションを中心に理学療法業務に従事しています。修士過程で学んだ事を活かし、日々の臨床や研究業務に励んでおります。